

神奈川県知事賞

「ごはんと家族く私だつて負けないよ」

平塚市立みずほ小学校
4年 三田 果和

今年はいやだった。毎年のお盆のわが家のこう例行事に参加することが、どうしてもいやだった。でも、そんなことを言うとか冷たい人間だとか言われて、私がひどい人になってしまっただけだと分かっていいたから、どうしても言えなかった。わが家では祖父がなくなつてからお盆には、しよっぱいしやけが入つたおにぎりを作つておもてなしをする。これは祖父の好物を知っている姉が決めたことだ。祖父は姉が七才、私が一才になる前に亡くなつたので私は祖父の顔だけしか知らない。でも、姉は祖父にかわいがつてもらつた思い出がたくさんあるから祖父のことが大好きで、自分がお世話になつた分お盆には祖父との思い出がいっぱいつまつたおにぎりでおもてなしをしてあげるんだと毎年張り切っている。昨年までの私は意味がよく分からなくても、お盆にはおにぎりを作ることが楽しくてただ作っていた。しかし、今年の私は気づいてしまったのだ。祖父は姉をかわいがつていたから姉のおにぎりを楽しみにしているだろうけれど、私のおにぎりなんてうれしくないだろうということ。祖父が知っていた私は赤ちゃんだったし、今の私なんて分からないだろうなと。そう思い始めたらどんどん心が黒くなつて、トゲトゲが生えてきてつまらなくてしかたがなくなつてしまった。それは態度にもでていたのだろう。お盆一日目の夜祖母が、明日は祖父が東京にお買い物に行く日だから、生前祖父が使っていた財布に小ぜいを入れて来てほしいと声をかけてきたのだった。そして私が財布に手をのばすとそこに一緒に、大きなたいを目の前にニコニコの祖父が赤ちゃんだった私をだっこしながらごはんを食せようとしているおくいぞめの時の写真があった。そしてその写真のうらには祖父の字で「かわいいかのん、早く大きくなあれ。」と書いてあった。それを見ていた私に祖母が、祖父は入院中に毎日その写真を見て「かわいいな。会いたいな。」と元気をもらっていたと教えてくれ、祖父は今でも毎日私のことを見守っているのだから私が成長しても分かるんだよ、とも言ってくれた。祖母の優しい気づかいは、祖父と私を近づけてくれた。いろいろな気持ちさまざつて涙が出た。でも、全てが満足だった。

次の日の朝は早く起きて、祖父が出かけるためのお弁当のおにぎりを家族みんなで作つた。もちろん私も張り切つて参加をした。たきたてのほかほかごはん、しよっぱいしやけを入れたおにぎりは、トゲトゲが取れた私の心と同じで、ツヤツヤだった。

だれにでもわすれられない味があるという。私たち家族にとつては、まちがひなくこのお盆のおにぎりもそのひとつだろう。あのふつくら笑顔の祖父の写真と共に、毎年作り続けようと思つた。優しい涙の味は幸せのおにぎりの味と一緒に。おじいちゃん、ありがとう。